

オークランド大学教育学部との連携による教育研修の実施

後藤 太郎¹・荒尾 浩子²

教員を目指す三重大学教育学部生の国際性を育むための教育研修プログラムを、近年、急速に教育改革の進んでいるニュージーランドで実施することを計画し、オークランド大学教育学部の協力を得て実施した。この研修は、ニュージーランドの教育事情に関する講義、オークランド市内の幼稚園、小学校、中学校、高等学校の授業参観と振り返り、およびオークランド大学教育学部の授業参観からなる。研修期間は現地で9日間とし、2011年と2012年9月中旬に行い、学部生および大学院生10名が参加した。ニュージーランドにおける自律的な学校経営、教員同士の協働的な職能開発、児童・生徒に応じた指導を直接見聞きすることができた。アンケートから、学生はニュージーランドにおける教育方法・評価に関する理解や、日本における多文化教育のあり方を学び、主体的学習力について向上したと回答していた。本学部において意義のある海外教育実地研究研修と位置づけられる。

キーワード：海外教育研修、ニュージーランド、実地研究、授業見学

1. はじめに

グローバル化時代の今日、高等教育において国際社会で活躍できる人材を養成するためには、学生に、外国語の習得だけではなく、異なる文化的背景を有する人々の理解と、国境を越えた適応能力の獲得が必要となっている。このために、学生の海外派遣する機会を設け、支援する体制の整備が重要となる。

将来、小中学校教員を目指す教員養成学部の学生にとっての海外研修は、単に語学研修だけでなく、海外の教育現場の見学などを含めたプログラムが考えられる。これにより、海外の小中学校の教育現場と日本の教育現場の比較体験や、学校教育と教員をめぐる諸課題に関する国際的な視野を広げ、教育のあり方や新しい教師像を考える機会となるだろう。三重大学教育学部では、このような教育現場の視察を含めた海外教育研修は、三重大学と協定を結んでいる中国天津師範大学での研修がある（森脇ら、1999）。しかし、現在、英語圏での海外教育研修は実施されていない。

私たちは、海外教育研修を実施する上での条件として、次の5点を重視した。1) 英語圏であり、留学生が多いこと。これにより、円滑な国際交流を図ることができる。2) 教育先進国であること。これにより、学生が教育に関する問題意識を高めることができる。3) 多文化の児童・生徒がいること。これは、異文化理解は三重県の教育課題に対応する上で欠かせないこと。4) 大学の夏期休暇中に訪問し、この間に教育現場の視察が可能で

あること。5) 安全で時差が少ないこと。このことは、心身の健康管理を容易とする。

後藤は、ニュージーランドで出版されている高校一大学向けの生物学教科書の翻訳本の出版準備を進めていた2009年にオークランド大学教育学部を訪問し、高校生物と中学校理科の授業参観を行なった（アラン・後藤監訳、2011）。教育改革の進んでいる学校現場を見る機会を学生に提供したいと考えたことと、ニュージーランドは上記5つの条件を満たしていたことから、教育学部の学生のための研修プログラムを立案し、2010年にオークランド大学教育学部国際交流担当者であるJohn Hope氏およびMa Maxine氏を訪問した。そして、三重大学教育学部の学生がオークランド大学教育学部での講義を受講し、ニュージーランドにおける教育について学ぶとともに、教育現場を視察し、多文化の中で重要な教育について学ぶための海外教育研修プログラムについての折衝を行なった。研修計画案はほぼ受け入れられ、2011年9月に第1回目、2012年9月に第2回目を実施した。

ここでは、その実施概要と、このプログラムに対する参加学生の意識について報告し、本学部における海外教育研修のあり方について考えたい。

2. 実施概要

(1) 教育研修プログラム

研修内容としては、大きく3つからなる。1つはニュージーランドの教育に関する特別授業であり、「ニュージーランドの教育制度」、「ニュージーランドにおける多文化教育」、「ニュージーランドにおける早期教育」、および「英語を母語としない人のための英語教育（ESL）の授業」、2つ目

1 三重大学教育学部理科教育講座

2 三重大学教育学部英語教育講座

表1. 海外研修プログラムの実施スケジュール

	1日目 (水曜)	2日目 (木曜)	3日目 (金曜)	4日目 (土曜)	5日目 (日曜)	6日目 (月曜)	7日目 (火曜)	8日目 (水曜)
午前	開講式 NZの教育事情	UAの授業参観 英語教育の進め方	幼稚園視察	自由 (動物園他)	自由 (博物館他)	小学校視察	中学校視察	高校視察
午後	UAの授業参観 振り返り	多文化教育について 振り返り	UAの授業 参観 授業検討会	自由	自由	授業検討会 UAの授業参観	授業検討会 UAの授業参観	授業検討会 修了式 お別れ会

はオークランド大学教育学部の講義の聴講（5回）、3つ目は、幼稚園、小学校、中学校、および高校の4学校園の授業見学とその振り返りである。訪問校は、幼稚園は、オークランド大学教育学部のキャンパス内にある Te Puna Kohungahunga、小学校は Oratia Primary School、中学校は Bucklands Beach Intermediate School（2012年は Remuera Intermediate School）、高校は Pakuranga College であった。

研修期間は9月中旬の11日間（現地9日間）とし、日本を月曜日に出発し、翌週の木曜日に帰国するものとした。学生の宿泊は、オークランド大学の留学生を受け入れるホーム・ステイで、1家族に1名が滞在した。プログラムの概要は、表1の通りである。この研修の最終日には修了式が行われ、受講者はプログラム修了証明書を受けた。

(2) 実施スケジュールと指導体制

2011年度の研修は9月12日（月）～22日（木）、2012年度は9月10日（月）～20日（木）とした。2011年度の研修を例に、その実施準備をあげると、1月26日に説明会を開催し、募集を開始した。参加学生は9名で（教育学部英語教育コース2年1名、4年4名、理科教育コース2年1名、4年2名、教育学研究科家政教育専修1年1名）であり、女性7名、男性2名であった。指導や引率の教員として後藤と荒尾があたり、学生サポートとして教育学部地域連携室事務員で留学経験のある小河久美があたった。危機管理に関しては、学部における緊急管理マニュアルに従うとともに、学生の指導教員との連絡体制を整備し、海外旅行傷害保険に加入することを義務付けた。

海外研修に向けた準備として、以下の5回の打ち合わせを行い、Moodle上で連絡や意見交換を行なった。特に、研修ガイドブックの作成と、交流会やお別れ会での挨拶や大学紹介等の準備を行なった。

第1回目 3月23日 研修内容、行程の説明、出発準備、参加者の役割分担

第2回目 5月18日 ニュージーランドの教育システム、オークランド大学について

第3回目 6月29日 オークランドでの生活、ガイドブック制作、交流会で挨拶等の準備

第4回目 8月24日 ガイドブックの確認、交流会での挨拶等の確認

第5回目 9月7日 最終確認

また、研修実施後は、以下の指導を行なった。

10月5日 振り返りシート提出

10月19日 事後指導と研修の振り返り

10月30日 報告書提出

12月21日 報告書に基づく振り返り

第2回目となる2012年度の参加者は、参加学生は10名で（教育学部英語教育コース2年1名、4年1名、国語教育コース4年1名、理科教育コース2年1名、学校教育コース2年3名、人間発達科学コース2年2名、特別支援教育コース2年1名）であり、女性7名、男性3名であった。指導と引率には、後藤と荒尾の他、教育学部学校教育講座教授の佐藤年明があたった。

オークランド大学教育学部国際交流担当者である John Hope 氏が2011年7月および2012年5月に三重大学を訪問された。その際、参加学生を対象として、Hope氏によるオークランド大学の特色やプログラムの概要に関する事前指導を実施した。

研修に必要な経費としては、航空代金以外に、研修プログラム経費（授業料、学校訪問料、ホームステイ代等）が約18万円であった。2011年度については、日本学生支援機構による留学生交流支援制度（ショートビジット）プログラムに採択されたことから一人あたり8万円の補助がでたが、2012年度は不採択であったため、三重大学国際交流事業経費から一人あたり2万円の補助をするに留まった。

3. 研修の成果

研修で期待される効果としては、以下のようなことである。

① 教職に就くための意識の向上につながる。

② 外国の教員養成のための授業の参観から、大学で何

を学ぶかを見直す機会となる。

- ③ 外国の教員志望の学生との交流により、教員となるための新たな課題を見つける機会となる。
- ④ 外国における多文化教育についての教育現場を見ることで、日本におけるあり方を考える機会となる。
- ⑤ 日本の教育の優れた点や、改善すべき点について考える機会となる。
- ⑥ 新しい視点での授業法や教材開発について考える機会となる。

2011年に初めて実施した研修であったが、ニュージーランドの教育システムを学ぶための充実したプログラムであった。ニュージーランドの教育に関する特別授業は、小中学校の教員経験者で教員研修などの指導実績が豊富なオークランド大学教員や非常勤講師3名によるものであった。教育改革によって、教師主導の画一的な学習でなく、一人ひとりの教育ニーズにあった教育が推進されていることや、子どもたちの学修支援をすることが教師の役割であることが解説された。このことは、学校園の訪問や授業見学で、教員の話聞き、子どもたちの様子

をみて実際に確認することで、教員を目指す参加学生にとって大きな刺激となった。

今回の教育研修に対する学生の意識に関するアンケート回答結果から、短期間の研修ではあるが、特に国際理解に対する意欲が向上し、ニュージーランドにおける教育方法について理解が深まった点で高い評価を受けた(表2)。

「留学、学習、国際理解に対する意欲が向上したか」という問いに対しては、以下のような回答があった。

- ニュージーランドの教育制度における日本との相違点から、それぞれのメリット・デメリットを考察することによって、自分自身の教育観が変わった。
- 日本と全く異なる他国の文化、教育に触れたことで、自国のそれに対する関心が非常に高まった。
- 「当たり前」の身の回りに、疑問や興味を持って関心の目を向けられるようになった。
- 日常的に英語を使用することで、英語力の向上について意識が高まった。
- 英語を使用して多文化を知り、他国の人の考えを知ることによって、やはり英語は大切であり、その必要性について再認識した。
- 留学などを通してさらに国際理解を深めていきたいという動機づけになった。

表2. 今回の短期留学に対する学生の意識. 学生の学年は、2011年は大学院1年1名、4年6名、2年2名の計9名、2012年は4年2名、2年8名の計10名.

- 項目A. 今回の留学を通して、留学、学習、国際理解に対する意欲は、参加前に比べてどのように変化しましたか。
- 項目B. 今回の留学に参加して、次の留学への関心は高まりましたか。
- 項目C. 今回の留学に参加して、三重大の教育目標である4つの力の中のモチベーションは、成長しましたか。
- 項目D. 今回の留学に参加して、三重大の教育目標である4つの力の中の主体的学習力は、成長しましたか。
- 項目E. 今回の留学に参加して、本プログラムの教育目標である「ニュージーランドにおける教育方法・評価に関する理解」について考えることができましたか。
- 項目F. 今回の留学に参加して、本プログラムの教育目標である「日本における多文化教育のあり方」について考えることができましたか。

参加年度	0 全く向上 しなかった		1 わずかながら 向上した			2 少し向上した			3 ある程度 向上した			4 かなり 向上した			平均値		目標値	
	11	12	人	11	12	人	11	12	人	11	12	人	11	12	人	11		12
項目A	0	0	人	0	0	人	0	0	人	1	3	人	8	7	人	3.9	3.7	3.5
項目B	1	0	人	1	0	人	0	0	人	3	5	人	4	5	人	2.9	3.5	3
項目C	0	0	人	0	0	人	0	1	人	2	5	人	7	4	人	3.8	3.3	3.5
項目D	0	0	人	1	0	人	0	3	人	4	5	人	4	2	人	3.2	2.9	3.5
項目E	0	0	人	0	0	人	0	0	人	3	4	人	6	6	人	3.7	3.6	3.5
項目F	0	0	人	0	0	人	1	2	人	3	7	人	5	1	人	3.4	2.9	3.5
合計	1	0	人	2	0	人	1	6	人	16	29	人	34	25	人			

表3. 参加学生が次の留学の機会として考えていること(複数回答を含む)

参加年度	11	12	人	参加年度	11	12	人
1. 正規課程への留学	2	1	人	5. 協定大学への短期留学(研究生)	1	2	人
2. 語学研修	7	5	人	6. 三重大国際ジョイントセミナー&シンポジウム	0	0	人
3. 国際インターンシップ	1	1	人	7. 海外フィールドスタディー	1	3	人
4. 協定大学への短期留学(聴講生)	1	3	人	8. その他(教育研修)	1	1	人

ほとんどの学生が留学への関心が高まったと回答していたが(表2)、語学研修で行きたいという学生が多かった(表3)。これは、この研修に参加した学生の一部は海外留学の経験をもつことや、英語に関心のある学生が多かったためと思われる。教育現場に関わるインターンシップやフィールドスタディー、および今回のような教育現場の見学を主体とした教育研修への関心も高かった。

三重大大学の教育目標として、「4つの力」、すなわち「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」、それらを総合した「生きる力」があるが、その中の「感じる力」の具体的な能力について、今回の研修の影響をアンケートでは2点について尋ねた。その一つとして「モチベーションは成長したか」という問いに対しては、ほとんどの学生が成長したと回答し、具体的には以下のような記述があった。

- 小学校教諭を目指す一人として、よりよい学習環境を子どもたちに提供できるのかということを追いかけていきたいという意欲が芽生えた。
- 今後の大学生活の中で、この体験を将来の教師生活で活かせるように自分の幅を広げ、より具体的に学級経営の方針や授業について考え、教員になるための準備を進めていこうと考えた。
- 教師と子どもとの関わり方や、授業の工夫、教室の雰囲気など、様々な視点において意識するようになった。
- 本とは異なる教育方法や、一人ひとりの子どもの進度に応じた教育をするなどの教育の考え方を知ること、日本で行われている教育がすべてだと考えずに、さまざまな教育への考え方や方法を学び、将来、自分が日本で教員になった時に応用できることは何か考えていこうと思った。
- 教職に就いてからも学び続ける事の意義を学べたことは興味深かった。「teachers are learners」という言葉を聞き、大きな視野で学習を捕えるようになった。

もう1点としてあげた「主体的学習力は成長したか」という問いに対しては、わずかではあるが向上したという回答が多く(表2)、具体的には以下のような記述があった。

- ニュージーランドでの教育目標の一つとして、生徒が主体的に、かつ自分のペースで学習できることが強調されていた。私も自分のやりたい勉強、やるべき学習に主体的に取り組む必要があると感じた。
- 日本では慣れた環境の中で受け身になりがちだったが、今回の研修では自分から進んで学習することができた。
- 日本には分からなかった新しい考え方や授業スタイルを見ることができ、ニュージーランドの教育の良い部分や日本でも実践可能なことを自分の学級経営や授業に取り入れられるように考えていきたと思った。
- 学びたい事、調べたい事、突き詰めた事が今回の研修で次々に浮かんだ。そして、それらの学習を今後深める為には何をすべきか、考えるようになった。

- 自分の無知を知り、まずは大学の授業を積極的に受けること、そして自分なりの学習を深めようと思った。
- ニュージーランドで授業を受けたときにいつも言われていたことが、「質問をしなさい」だった。自分が受け身の姿勢で授業を受けていたことに改めて気付いた。今回、「質問をしなさい」と言われて私は、授業の内容を一方的に受け入れるだけでなく、自分の中で解釈しようと努めた。

実際に、学生は日本での通常の授業では見られないほど積極的に授業を受け、質問をしながら理解を深める様子が見られた。また、学生同士の会話の中でも、教育に対する抱負を語っている場面が多かった。

ニュージーランドは多民族国家として認識されていることから、教育現場でも多文化教育が早期から行われているが、実態について講義や学校訪問から学生は知ることができ、教育の中で自然に異文化を学ぶ環境が整備されていることの必要性を感じていた。

4. 今後の課題

ニュージーランドは多民族国家であるがゆえに、とくに教育に力を入れ、近年急速に教育改革が進んでいる(吉田, 2004; 高橋, 2008)。その中で、オークランド大学教育学部はその指導的立場にある。ここでの講義と全ての校種の学校訪問により、学校経営が自律的に行われ、教員同士は協働的に知識や情報を得ていることや、教員の常に学び続ける姿勢を見ることができた。また、教員は子どもたちに教えるのではなく、サポーターでありファシリテーターであるということ、どの学校の校長や教員も述べていた。このことは、参加学生に大きな刺激となり、将来、教員になる上での新しい教師像を考える機会となったと言える。

参加学生の本研修に対するアンケートから、ニュージーランドにおける教育方法・評価に関する理解や、日本における多文化教育のあり方について考えただけでなく、国際理解に対する意欲や、三重大大学の教育目標である4つの力のうち、モチベーションや主体的学習力について全員が向上したと回答していた。今回の目的である、オークランド大学教育学部の授業および教育研修を通じて海外の教育を知り、将来教員になるための意識向上を目指すことは、ほぼ達成されたと言えるだろう。

プログラムは現地で9日間の短期プログラムであったが、充実した内容であり、学生は短期間のうちに多くのことを学び、教員を目指す上での大きな意識改革となった。プログラム内容は、本学部からの要望が基本となっており、オークランド大学教育学部との協力により、完成度の高い研修プログラムを組むことができた。

高等教育のグローバル化に伴い、海外でのインターン

シッパの推進や、フィールドワーク等の単位化を促進するなどの方策を整備することが、今後一層必要となってくる。学部として学生に多様な海外研修・体験の機会を提供することが、学部の国際交流事業として欠かせない。

現代的教育課題として「学力問題」、「人権問題」、「日本語を母語としない児童・生徒の指導」等が重要となっている。これらの課題解決力を養成するために、海外での教育実地研究では、自らが受けてきた日本の教育を相対化し、客観的立場から考察を行う研究的視点を強化するなど改善が必要だろう。

本学大学院教育学研究科に新設した研究科共通科目「教育科学特別研究演習」は、教育課題を現場に出向いてアクションリサーチ的アプローチで展開すること、特に海外教育実地研究により日本の教育事情を客観的に評価・研究することを目的としたものである。この教育研修を大学院の授業科目に位置づけるとともに、学部の授業科目である「教育実地研究」に位置づけるなど、単位化を図ることは必須だろう。

参考文献

- アラン, R. 後藤太郎監訳 (2011) *Senior Biology*, Biozone. ワークブックで学ぶ生物学の基礎. オーム社, 295 pp.
- 森脇健夫、板倉保代、康鳳麗 (1999) 中国小学自然の授業分析－『葉の蒸散作用』(5年)－. 三重大学教育実践研究指導センター紀要 第19号 pp.37-48.
- 高橋望 (2008) ニュージーランドにおける教員の職能開発の実際. BERD, No.14, pp.36-41.
- 吉田裕治 (2004) ニュージーランドの高等教育制度改革の概要. 会計検査研究 No.60, pp.189-198.

参考 web ページ

- 「第5章 ニュージーランド」,
<http://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/tyosa/h22koku-sai/2_5.html>
(2012/10/30 アクセス)

An educational training program in New Zealand collaborated with the University of Auckland.

Taichiro Goto¹ and Hiroko Arao

1 Science Education, Faculty of Education, Mie University

2 English Education, Faculty of Education, Mie University

For the purpose of fostering international minds of the students of Faculty of Education of Mie University, an educational training program was conducted in New Zealand, where the education reform is rapidly changing. The program was implemented in collaboration with the Faculty of Education, the University of Auckland (UA), which plays a central role in the teacher training of New Zealand. This training program consists of learning about the educational system of New Zealand, classroom visitations of the kindergarten, the elementary school, the junior high school, and the high school including the review sessions of the visitations, and participation in some classes of the UA. The training period was 9 days in middle of September in 2011 and 2012. Ten students participated in the program each year. The students learned about self-directive school management, cooperative professional development between teachers, and guidelines to meet individual requirements of students. From the results of a questionnaire about this training, it was found that the students deepened their thoughts about the educational methods in New Zealand and their understandings about evaluation and multicultural education in Japan. In addition, their interest for studying international understanding increased as did their “motivation” and “independent learning abilities”, both of which are educational goals in Mie University. This program is planned to continue indefinitely as an overseas training program in our faculty.